

## 【教材研究】

## 芥川龍之介『芋粥』の原話を読む

## ―『今昔物語集』巻二十六第十七話「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語」との位相

としひとのしやうぐんわかきとききやうよりつるがにこゝろをみてゆくこと

會田 実

## ―はじめに

昨年度(平成三〇)、日本文学科専門必修科目「日本文学概説」(二年次後期・令和元年度から二年次後期)では、芥川龍之介『芋粥』の典拠となった説話の講読を行った。芥川作品の解説も行った上で近代文学としての芥川作品と典拠話とを比較し、古典文学とは何か、近代文学とは何かを考えさせようという趣旨である。もとより、それぞれ傾向性も異なり、作品数も多い古典文学と近代文学の特徴をこれで一般化できるとは考えていないが、芥川作品は他に『羅生門』『鼻』(一昨年度はこの両作品の典拠話を講読した)など中等学校の教科書に採用されることが多く、『芋粥』の典拠話もこれらと同様に『今昔物語集』に収録されており、古文としても分かりやすいので、一年生には親しみやすく、かつ大学における学習・研究というのも認識させるための導入として適当であると考えたのである。小論では、講義において問題としたこと、指摘したこと、また講義終了後に気づいたことなどを述べてみたい。

なお、文中の『今昔物語集』本文は、岩波書店刊新日本古典文学大系『今昔物語集』から引用している(巻二十六第十七話と巻二十七第二話は森正

人校注『今昔物語集五』(一九九六年)から、巻十四第四十五話は池上洵一校注『今昔物語集三』(一九九三年)から)。

芥川龍之介『芋粥』の引用は、岩波書店刊『芥川龍之介全集』第一巻(一九七七年)から。

## ―『今昔物語集』について

『今昔物語集』は、平安末期(いわゆる院政期)に成立した仏教説話集である。学生に配布したプリントには左のような説明を載せている。(図説国語というのは補助教材として指定している東京書籍『新総合 図説国語』(二〇一四年二月新訂一版)のことである)。また説明文は、小峯和明監修『図説あらすじでわかる!今昔物語集と日本の神と仏』(青春出版社 二〇一二年四月)などを参照している。

『今昔物語集』について 図説国語 p146参照

書名について: 「今昔」の「物語」(≡説話)の「集」という意味。

全三一巻、ただし八、一八、二二巻は欠巻。

説話の総数は（題目または本文のどちらかを持つものも含む）一〇五九話。

そのうち題目だけあって本文のないものは一九話

典拠…所収されている説話の多くは、先行資料によっている。ただし採録の際、『今昔』独自の書き換えが認められるものがある。↓翻訳問題

編者…未詳

単独編集、複数者共同編集両説あり。話の傾向から比叡山

関係者ではないか、いや最古の写本（鈴鹿本）の伝わりかたからみて東大寺や興福寺の南都関係者ではないかとか学説はあるが、よくわからない。しかしながら近世以来言われてきた源隆国説は誤りとされる。

関係説話集…『宇治拾遺物語』、『古本説話集』とは共通した話が多く（同

話・同文的同話）、この三集は幻の『宇治大納言物語』と関係していると言われる。

成立…収録されている話の内容から判断して二世紀初頭から半ば頃では

ないか（一一二〇～一一四〇）と推定されている。

組織及び構成…天竺部―巻1 釈迦誕生・仏教教団成立史 巻2 釈迦

説法・衆生教化 巻3 釈迦衆生教化・入滅

巻4 釈迦滅後の仏法弘通史

巻5 天竺史・雑話（釈迦前生譚など）

震旦部―巻6 中国への仏教伝来弘通史 巻7 三宝

（法）の功德 巻8（欠巻）おそらく三宝（僧）

の功德と靈驗 巻9 孝養・転生と因果応報

巻10 震旦史・雑話

本朝部―巻11 日本への仏教伝来弘通史、諸大寺縁起

巻12 仏教弘布（塔・法会の縁起）・三宝（仏・

法―法華経）靈驗 巻13 三宝（法―法華経）

靈驗 巻14 三宝（法―法華経など）靈驗

巻15 三宝（法―往生）靈驗 巻16 三宝（僧

―観音）功德と靈驗 巻17 三宝（僧―菩薩・天）

靈驗 巻18（欠巻）おそらく三宝（僧）功德

靈驗 巻19 出家・孝養・三宝加護

巻20 天狗・冥界・因果応報 巻21（欠巻）

おそらく本朝史（―天皇紀） 巻22 本朝史（―藤

原氏列伝） 巻23 技芸（強力） 巻24 技芸（術

内容…天竺（インド）部・震旦（中国）部・本朝（日本）部の3部構成。

↓三国

各話はさらに仏法部・世俗部に分けられる。仏教がインドに起こりやがて東へ伝わっていく（仏法東漸）という歴史観によっており、仏法・世俗という分け方も仏教の世界区分である二区分による。

所収話は、三国各国の種々の階層、人々の様相を語るもの、また仏教東漸に関するエピソードなどを載せ、仏教的歴史観や世界観をもとに説話集を組織構成している。

配列…各話の配置・配列も仏教歴史観・世界観のもと、世界像を描こうとするもの。また各話はそれぞれ類似した内容の話二話（三話の場合もあり）が隣同士（二話一類）になっている。

道・芸能など) 卷25 技芸(合戦・武勇などと

兵列伝) 卷26 宿報(諸国の奇譚・異聞)

卷27 霊鬼(霊鬼変化などの怪異) 卷28 滑稽

(貴賤僧俗の笑話) 卷29 悪行(盜賊譚、動物譚 卷30 雑事(歌物語的恋愛譚)

卷31 雑事(諸拾遺話題)

は次のような内容である。

後に鎮守府將軍となる平安中期の伝説的武人藤原利仁は若い時、都で藤原基経(最初の関白)に仕えていたが、利仁はまた越前の国の「盛徳」者(大豪族)の智となっていたので越前の国とも常に行き来していた。

あるとき、基経の屋敷で正月の大饗(大臣家が正月に親王や廷臣を招いて行う大宴会)があった。当時、大饗の食べ残しは、基経の屋敷に仕えている者達(侍)がいただくのが慣例だった。長年ここに仕えて部屋住みとなっていた五位の侍がいたが、残り物の芋粥をすすりながら舌打ちをして「哀し、何かデ暑預粥二飽カン」(ああ、芋粥を飽きるほど食べたものだ)と言った。利仁はそれを聞いて「イデ、飲飽セ奉ラバヤ」(では、飲み飽かせて差し上げましょう)と申し出る。五位は「何ニ喜フ侍ン」(どんなに嬉しいことでしょう)と答えた。それから四、五日して利仁は五位を湯に誘う。五位は喜んで利仁に従う。湯は東山の辺りと利仁は言ったが、栗田口を過ぎ山科も過ぎた。

埋もれた説話集…実は中世及び近世はじめ、本集はほとんど知られていなかった。広範に享受されるようになるのは、近世でも中期(一七三三年)に改編版本が出版されてから。↓伴信友が研究

未完成の説話集…欠巻部は本来あったものが失われたのではなく、本集が未完成のためにその巻が編集されなかった、あるいは話が集めたが何らかの事情で欠巻となったと考えられている。ただし欠巻部の本来のテーマは他の巻のテーマと構成から推測できる。

そして近代に入り芥川龍之介が小説の題材(「鼻」「羅生門」など)にするに至って注目されるようになった。小泉八雲は芥川より早く『怪談』に本集にある説話を題材にした話を載せている。「死体にまたがった男」。この原話は今昔二四一〇「人の妻の悪霊に成りその害を除く陰陽師のこと」。

―典拠話について

『今昔物語集』卷二十六第十七話「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語」

【教材研究】芥川龍之介「芋粥」の原話を読む―『今昔物語集』卷二十六第十七話「利仁將軍若時從京敦賀將行五位語」との位相

湖西岸の交通の要所)まで迎えをよこせと敦賀の家に告げてこいと狐に言い含めて放す。五位はこれを悪ふざけのように見たのだが、果たして翌日高島に至ると巳の時に何人もの男達が迎えに来ている。そして、夕べ利仁の妻に狐が憑いて利仁の言葉を伝えたことを話すのであった。

利仁の舅である有仁の家に着き、芋粥の件を話すと、「安キ物ニモ飽カセ給ハザリケル哉」(安いものにも満足されていないのですなあ)と笑い、様々にもてなす。その夜、五位が寝ようとする外で大声で呼びかけている。何かと思ひ聞くと、この近辺の下人(有仁の領民)たちに「明日卯時二、切口三寸、長サ五尺ノ暑預、各一筋ヅ、持参レ」(明日朝卯の時に、切り口が三寸、長さ五寸の山芋を、それぞれ一本ずつ持ってこい)と命じているのだ。暁方、

外を見ると、長筵を敷いたところに木のように見える山芋が家の軒に届くばかりに積み上げられ、また一石も入る釜が五つも据えられ、そこに桶に入った味煎（甘藷を煮詰めた甘味料）を水を注ぐように入れて沸かせ、切った山芋を次々と投入するのであった。そして大量の芋粥が、出来上がった。大きな土器を添えて、一斗も入る提（柄やつると注ぎ口のついた金属の容器）三つ、四つに芋粥を汲み入れて五位のところを持つてきたが、余りのことに五位は「一盛ダ二否不食デ、「飽ニタリ」（一盛りも食べられないで、もう十分です）と言うしかなかった。その後、一月ばかり敦賀に滞在した五位は、

豪華なものでなしを受けたばかりでなく、たくさんの高級な土産をもらい「富テ上」（裕福になって上京）したのであった。本話の話末評語は次のように結ぶ。「実ニ、所ニ付テ年来ニ成テ被免タル者ハ、此ル事ナン自然ラ有ケルトナン語り伝ヘタルトヤ」（本当に、一つの所で長年仕えて一目置かれてゐる者は、このようなことが自ずとあるものだなあと語り伝えているとか）。

本話が実話であるかどうかはわからないが、この時代の地方領主の富と力がどのようなものであったかは知られるだろう。利仁の伝説的武人像を形成する豪快さの一端を示すエピソードであると共に、狐を操る箇所に表示されるようにそれが単に性格や体躯ばかりでなく通力を持つ異能の人格として形象されているのである。

### ―芥川「芋粥」の利仁と五位

『芋粥』の初出は、大正五年（一九一六）九月一日発行の『新小説』である。本作は、五位の造形にゴロリの『外套』の主人公アカジ・アカキエヴィツチの影響が強いことが指摘されている（後述の清水著によると久米正雄「座談会 菊池久米を囲む文学論」『文学界』（昭和十一年（一九三六）九月）がその指摘の初出らしい）。

『芥川龍之介事典』（明治書院、昭和六〇年十二月）「芋粥」の解説で三好行雄は、原話との相違を、

原梗との違いは、利仁の庇護者とも言える男の有仁の存在を削ったこと、夜伽の女や帰京時の五位への莫大な贈り物の話など、いわゆる伝報譚のモチーフが消えたことである。芥川の独創は、まず第一段落で徹頭徹尾五位を弱者にすることで（おまけに彼は「酒のみの法師」に「うけ脣の女房」を寝取られたコキユでもある、芋粥を飽きるほど飲んでみたいという唯一の夢、希望を際立たせ、原梗の有仁の存在や伝報譚のモチーフを消すことで、利仁の敦賀の家へ連れて行かれ、豪華な接待攻めと膨大な芋粥の接待にあずかり、うんざりして食欲も出なかったという原梗の主筋を見事に小説化したことだろう。五位にとつて、「芋粥に飽かむ」ことがいともたやすく現実と化し、食欲も萎えた彼の目前で、利仁に手捕りにされ使者の役を果たした阪本の野狐までが、彼の夢に見た「芋粥に飽かむ」想いを味わっている。五位が、多くの侍たちに愚弄され、京童にさえ罵られて、色のさめた水干に、指貫をつけて、飼い主のいない形犬のように朱雀大路をうろついていたかつての憐むべき孤独な彼自身を懐かしく想うのは当然なので、周囲から拒否される孤独であったからこそ、「芋粥に飽かむ」ことが唯一の生甲斐として、夢として育ったのである。

と述べている。三好が指摘するとおり、五位の侍は、『芋粥』では「徹頭徹尾」弱者にされ、何の威厳も魅力もなく嘲笑されるばかりの中年男として造形されている。『今昔物語集』の原話も、五位の侍は「源氏物語」の末摘花の君や「宇治拾遺物語」一二四話の青常の君などと同様に、嘲笑される人物の身体的特徴の慣用である赤く高い鼻（鼻高ナル者）、鼻崎ハ赤ニテ）の男として紹介はされるが、芥川『芋粥』の五位ほどまで徹底されていな

い。清水康次の言い方に拠れば、

無位の侍(利仁<sub>一</sub>會田注)にとつては、世の中からはじき出された五位は、逆に、決して他人を迫害することのない存在として、「一味の慰安」を与えてくれる存在となつてゐる。(清水康次『羅生門』の世界と芥川文学) 大坂大学出版会、二〇一九年一月。一五六頁)

となる。そして、子供たちに虐められる「彪犬」を助けようとして「何ぢや、この鼻赤めが。」と子供にも言われてしまう五位は、「子供たちにいじめられるむく犬は、五位自身の姿でもある。」(清水同書一五七頁) というように赤鼻の形容は『芋粥』に引き継がれていても、その貶め方は『芋粥』の方が厳しくまたそれが「徹頭徹尾」弱者ということなのである。

### ―両話の世界

文体は、両話とも語り手が、登場人物の心中に介入して、物事や状況の説明をしていくことは類似している。そういう意味では、芥川が原話のスタイルを踏んで叙述しているとも言える。数例を示せば次のようである。

#### 典拠話―

(高島に利仁を迎えに来た男たちが、昨夜起こつた狐の怪を語つたとき)

利仁、此ヲ聞テ頬咲テ、五位ニ見合スレバ、五位、奇異ト思タリ。

(敦賀の屋敷で豪華な接待を受けた五位に)

楽ト云バ愚也ヤ。

(五位が敦賀の屋敷で就寝しようとしたときに、外で領民に山芋を翌朝持つてこいという呼びかけを聞いて)

奇異クモ云哉ト聞テ寝入ヌ。

#### 『芋粥』―

(むく犬を虐めている子供たちに注意したが、言い返され傷ついたとき)  
(子供が) 高慢な唇を反らせて、かう云つた。「何ぢや、この鼻赤めが。」

五位は、この語が自分の顔を打つたやうに感じた。

(芋粥を飽きるほど飲んでみたいという五位の願望を)

彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さへ、それが、彼の一生を貫いてゐる欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事實は、彼がその為に、生きてゐると云つても、差支ない程であつた。

あくまで数例を出したに過ぎないが、右のようである。ただし、『芋粥』、典拠話ともそれは五位にのみ介入し、利仁の心中へは介入しない。利仁の心中は、利仁の会話と利仁の行動描写から推測するしかない。

また、一文の末は、典拠話では「ケリ」が多用されるが、『芋粥』は過去形使用が多い。助動詞「けり」は、伝聞、詠嘆、過去を意味するが、過去でも伝聞的過去であるので昔話のように「であつたそうだ」と直訳できるものだ。これは、聞き書きのスタイルをとる説話類の特徴だ。近代文学が過去形となるのは、近代に入つての西欧やロシアの文学作品翻訳の影響だろう。

内容的に大きな相違は、先に三好が書いていたように、五位を「徹頭徹尾」弱者にしたこと、舅有仁の応対と帰京に際しての莫大な贈物を削つたことだろう。

これによつてその世界はどのように違ってくるのだろうか。



### ―異界訪問譚としての典拠話

清水康次は、次のように述べている。

原話では、五位は、ひと月ほど利仁の館にとどまり、歓待を受け続ける。そして、都に帰るときには、たくさんのみやげをもらって、富者となって上京する。長年の努めを続け、一目置かれるようになった者として、その努力の果報を得ている。だから、利仁の館は、長年の労苦が報われる場所であり、たとえれば亀を助けた果報として浦島太郎が招かれる竜宮城のような世界であるといえる。その点では、原話は、桃源郷を訪れるような、一種の異郷譚ともいえる。都から敦賀への旅は、願望がかなう旅であると同時に、歓待と富を得る喜ばしい旅である。

しかし、「芋粥」の五位は、都では誰からも冷淡に扱われ、評価などされておらず、そのような果報を得る人物ではない。主人公の人物像の変更が、報われる喜びの旅を、決して喜べない旅に変えていく。つまり、作者は、「今昔物語集」の原話の展開をそのまま使いながら、まったく異なる結末を持つ、もう一つの別の物語を作っているといえる。(清水前掲書一六五頁)

清水の鋭い指摘である。典拠話は、冴えない五位が京域(境界)を超えて、敦賀という土地に入ると、都にいた時とは比べものにならない歓待を受けて、芋粥を腹一杯食したいという都での望みなど、望みという範疇にも入らないつましいことであったことを実感させられる話である。大量の芋粥を見たただけでお腹がいっぱいになり一盛りも食することができなかつたというのは、ここ敦賀では五位の置かれた境遇が反転していることを表している。その証が、一月に及ぶ滞在時の豪奢な接待であるし、帰京に

際しての莫大な土産物の数々なのだ。「富テ上」った(富んで帰京した)が示すことは、無私の善行者が超常的な力を持つ者に認められて桃源郷や竜宮に招かれ、盛大なもてなしを受けた後、莫大な富を得て(または富を作り出すものをもらって)帰郷する物語(おとぎ話)ということなのである。その時、超常的な力を持つ者とは利仁に他ならない。変化の動物として知られる狐を自在に操ることはそれを表しているよう。

『今昔物語集』巻十四第四十五話「依調伏法験、利仁將軍死語」では、新羅を服属させるべく鎮守府將軍の利仁に軍を率いさせて派遣しようとしたところ、新羅は異変を察知して、惠果和尚の高弟である宝全阿闍梨を宋の国から請じ調伏法を行わせた。すると、利仁は出立して間もなく、山崎で病に伏した。伏しても、俄に起き上がって、空に向かって大刀を抜いて切りかかることが度々あったが、倒れて死んでしまった。本話の話末評語は次のように記す。

此レヲ思フニ、利仁將軍モ糸只人ニハ非ズトナム思ユル。然力空ニ向テ切ケムハ、定メテ目ニ見エケルニコソハ有ケメ。然レドモ、法ノ験シ掲焉キガ故ニ、忽マチニ死ヌル也ケリトナム語り伝ヘタルトヤ。

「只人ニハ非ズ」という表現は、『今昔物語集』巻二十七第二話「川原院融左大臣靈宇陀院見給語」に宇多院の前に現れた源融靈を宇多院が叱りつけ退散させたところがあるが、その宇多院を「只人ニハ似サセ不給ザリケリ」と評価する同様の表現があるように、超常的な力を持った異能者に対して使われることばと考えるとよいだろう。ただし、巻十四第四十五話では、その能力よりも仏法の調伏が上回ると言っているのだが。

## —主人公は誰か

『芋粥』も典拠話も、語り手がその心中に介入するのは五位の侍だけであり、利仁には介入しないと上述した。ストーリー展開のために語り手介入があるとみると、五位の侍にしか介入しないのであれば、それは五位の侍を展開の軸にしたいということになるので、その軸こそ主人公ではないかということになれば、両者とも主人公は利仁ではなく五位の侍になるが、少なくとも『芋粥』は意識的に五位を主人公にしている。

特に『芋粥』において、長年の願望がたやすく実現してしまったことは、その願望がたいした価値のなかったことなだと五位に認識させてしまう作用は典拠話よりも強い。だから五位の心境は小説の中で次のように語られる。

(芋粥を飽きるほど飲んでみたいという五位の願望を)  
彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さへ、それが、彼の一生を貫いてゐる欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事實は、彼がその為に、生きてゐると云つても、差支ない程であつた。(二〇八頁)

色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のない彪犬のやうに、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き、孤獨な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云ふ欲望を、唯一大事に守つてゐた、幸福な彼である。(二二六頁)

清水はここから、心の底では実現できないと思う願望を胸に抱いていたときの方が幸福だったのではないかと五位自身が思ったと読み解く。そして、

利仁は、あからさまな力で人や狐までも支配する。ただ、そこには都の人々のような陰湿な無視や愚弄はない。野性的な武人としての利仁には、「羅生門」の下人のあからさまな力と重なる部分がある。この世界で生きることが、都での迫害から解放されることであるが、同時に、自分の実力どおりの生き方を要求されることにもなる。自分の胸の中だけに秘めた願望に一生を捧げることができない。湖北の世界は、すべてがありのままにさらけ出される世界である。

ありのままの力の世界で、利仁に支配されながらも人並みに扱われて生きていくのがよいか、周囲の迫害の中で、自分の胸のみに願望を守って生きるのがよいか。五位は、その選択に迷わない。彼は、都での自分の方が幸福であつたと思う。芥川は、そう考える五位を描き。そう考える五位に共感している。(清水前掲書一七六、七頁)

清水も小説の主人公を五位とみているようだが、五位は、都にいたるときのようなあからさまな愚弄や無視を受けることはない。しかし、敦賀においてはむき出しの野生を持つ利仁の支配を受けざるを得ない。いや無視はないが、別種の愚弄はあるというべきか。

『芋粥』は、典拠話にあつた利仁の舅有仁の応対と敦賀で一月に及ぶ贅沢な生活を五位が送つたこと、帰京に際して多くの豪華な土産を持たせ五位が「富テ上」つたことを削つて書かない。敢えて書かなかつた故に、利仁の圧倒的な野生、清水が言うようなありのままの力の世界が強調される。それが利仁の野太いが細やかではない人格を際立たせ、言わばデリカシーに欠ける人間像を形象している。つまり利仁は都の人々とは違った意味での愚弄を五位に対してしているのだ。五位のささやかな幸福さえ乱暴に奪い去り、己の笑いとし、その富と力を見せつけたいだけの偽善者。そこからは典拠話にあつた利仁の常人を超越した姿、つまり伝説となる超人の要素は剥がれ落ち、人間の枠に留まつた利仁がいるばかりである。『芋

粥』でも狐を操る場面を置くが、それはもはや無意味と言っている。反対に、その異能が五位を惨めにさせることに加担さえしている。典拠話の如く、異界訪問譚として無私の善行者を認める神の位置にいる利仁であればこそそれは意味を持つのだ。その異能・通力の利仁が結局は五位に福を与えることは、利仁の単なる人望を表すものでないことはすでに明らかであり、話末で「実ニ、所ニ付テ年来ニ成テ被免タル者ハ、此ル事ナン自然ラ有ケルトナン語り伝ヘタルトヤ」と意味づけられるのも、利仁の神的位置を前にしてことなのだから、典拠話は利仁の称揚、つまり五位の侍への厚志を物語ることで利仁という人物（超人）を描いたということになる。そう考えてみると五位を軸にしながらも、物語構造としては典拠話の主人公は利仁であり、『芋粥』と位相を異にする。

### ―両話の位相の意味

典拠話における利仁は、『芋粥』の利仁とは対照的に、五位のささやかな願望を奪いながらも、それに替わる富を授けることで、芋粥を腹一杯食したいという貧しい利那的願望を、あるべき願望（富）の実現に置換したのである。

かつて、私は、この典拠話について次のように述べたことがある。

さて、巻二十六・17も飲食をモチーフにしながら、人のありさまを活写した話だ。芥川龍之介の『芋粥』の下敷きとなった話である。閑白に長年仕える五位の侍が、大饗のお下がり芋粥に舌鼓を打って、「哀レ、何カデ暑預粥ニ飽カン」と呟いたのを聞いた藤原利仁（平安期を代表する武人）は、ならば「イデ、飲飽セ奉ラバヤ」と申し出る。

五位とは微妙な位で、高級貴族にとっては出発点にすぎないが、この侍にとってはやっと昇りつめた位であつたらう。大饗は宮中や大臣家

で行われた盛大な宴会のことだから、そのお下がりではあつても饗宴料理の最後に出るデザートである芋粥（山芋のスライスを甘ずらで煮たもの）を腹一杯食べるということは、彼にとって単なる特定の食物への憧れではなく、このような饗宴を催すことのできる富と力への憧れの換喩といつてよかつた。いわば、ビールかけがしたいというプロ野球選手のことばが優勝への願いを意味すると同じように。「鼻高ナル者ノ、鼻崎ハ赤ニテ」といささか冴えない人物を表現するときの定番である鼻の擲揄を以て、この五位は紹介される。（中略）

大饗のお下がりではありながら、盛大な宴会のコース料理の最後くらいにしか出ない非日常の食物である芋粥を飽きるほど食べたいという願望にあらわされた憧れが、利仁によって芋粥そのものことにすりかえられて弄ばれ事態が進行する。このとき、利仁はこの五位の低位と推定される場所に逆説があるのだが、地方豪族の富を彼にみせつけ、結果、彼の憧れの一端を満足させるべく、一月ばかり滞在した五位に、高級な布や装束、牛馬などを与え、五位は「富テ」上京する。彼に与えたその程度の「富」は利仁にとっては土産程度のものでしかない。しかし、五位にしてみればその土産程度のもものは、彼がまた長年憧れた程の富と差はあつたらうか。人は何かに憧れ、想像するが、所詮、己の身の丈にあつた乏しい想像の域を出ないのが現実なのだ（『今昔物語集を学ぶ人のために』「7 飲食」世界思想社、二〇〇三年一月刊、一九三―一九四頁）

この五位の侍の五位が、正従上下でどうだったのか明らかではないが、五位という位には次のような時代事情があつた。

平安時代中期Ⅱ王朝時代の早い時期から、従五位下のすぐ下の正六位上という位階が、実質的に下級貴族の資格としての意味を帯びてく



る。すなわち、十世紀後半以降、正六位上の位階を持つ人々をも、下級貴族としてではあれ、貴族層あるいは貴族社会の一員と見做さざるを得ないような状況が生まれてきたのである。

実は、十世紀の半ばを過ぎた頃から、正六位上を除いて、下級の位階はほとんど消滅してしまう。いや、より正確に言うならば、正六位下から下の下級位階は、ほとんど誰にも授与されなくなってしまう、事実上、存在しないような状態になってしまったのである。(繁田信一

『下級貴族たちの王朝時代』新泉社、二〇一八年一月刊。一五頁)

利仁は十世紀前期に活躍した人物であるが、五位という位がもつ意味が低下しはじめた頃と考えてよいだろう。右の繁田の文は、学生にプリントで配布しているが、十世紀後半に入ると、少なくとも都においては、五位という位は既にやつと平の貴族に入れるくらいであり、決して高い位ではなくなった。もつとも、地方豪族にとつて大夫(＝五位)は、平安末に平家の戦力の中核を成した阿波水軍の長である田口(粟田)重能が阿波民部大夫と呼ばれたように、一國の豪族としては極官たる位ではあったが。

典拠話に対する旧稿を書いたとき、この五位という位について繁田が解説するような事情を認識していたが、その考察においては現代的な意味づけをしてしまったようだ。清水の『芋粥』の五位についての考察にあるように、五位の侍の「哀れ、何かデ暑預粥ニ飽カン」という眩きは、そのままとらえるべきものであったと思う。なぜなら、平安期の都の貴族の実状からすれば、名家の出身でもなければ高位に昇ることはまずなかったし、長年侍として仕え部屋住となっていたこの五位は別に生計を立てて財を得ようとする考えもなかったろう。とすれば、今現在のこと目先のことを考えて生きる他なく、望外の富を夢想することもまずなかったと考えるのが適当ではないだろうか。

だからこそ、典拠話の異界訪問譚としての意味が際立つのだ。芥川は、

その五位の位置を理解しながら、『芋粥』では、異界訪問譚から現実世界の個人へと五位を変えた。利仁の五位への好意は、典拠話では、多少の挪揄から始まるとはいえ、結果として厚志となっており、上述したように望外の富など現実に考えることなどなかったろう五位へ、思いも掛けぬ富もたらした。こうした位置にいる五位だからこそ、その逆転は生きるし、伝説的武人藤原利仁の大きさも表れるのである。これに対し、『芋粥』の五位は、都にいたときより貶められてしまい、利仁も親切心を装った底意地の悪い金持ちの聲に過ぎなくなる。言い方を変えれば、笑いものにして自分の慰みとするおためごかしの親切心とも言える。

芥川は、典拠話の世界を作り替え、現実の人間世界の心底にある悪意を炙り出し、我々の眼前に据えたのである。

### — 幻想としての現実

登場人物を異次元世界に招く説話を、生々しい現実の人間世界に置換し、我々の前に差し出したのは、『羅生門』もそうであった。そこでは原話にはない上層に昇る梯子を設定することで現実世界に繋ぎ、始めから盗人になろうと上京する男を、盗人になるかならぬか葛藤する下人とし、原話では鬼かも知れなかった老婆を哀れな老人として捨て去り、下人が現実の闇に消えていく物語に翻案した。梯子のない原話では、柱を男がよじ登って連子窓から老婆とそこに置かれた死体をほのかな灯りの中に覗き見る。それが異次元へ運ぶ装置なのだ。また、ありえない大鼻をもつ『鼻』の禅智内供も、典拠となった説話では自分の鼻に対する劣等感など微塵もない専横な人物として君臨していたが、小説ではその地位とは裏腹に劣等感に悩む現実世界にありがちな小心な人間であった。

説話の非現実的な異次元世界や夢物語を人間世界の現実に置き換えれば、どう見えるかを芥川はこれらの作品で試した。そして、それを見た我々は、

反転して原話を今度はどう読むか。芥川の近代小説が人間に向き合ったとき、説話の世界とは何かもそこで問われてくるように思えるが、では、その説話世界は（少なくともここであげた芥川が典拠とした説話）本当に非現実的な世界であつたのだろうか。

芥川は「今昔物語鑑賞」で『今昔物語集』巻十二第十七話「尼あま所被盜持ぬすまはる仏ぶつ自然奉値語しぜんほうぢご」について次のようなことを述べている。  
（岩波書店『芥川龍之介全集』第十四巻、一九九六年刊から）

この話も樹の上の箱の中に畜生の音の聞えると云ふことに美しい生なまま々々しさを漲らせてゐる。金剛峰寺の不動明王を描いたのも或は職業的画工ではなかつたかも知れない。しかし、この話を作つたものは（若し「作つた」と言はれるとすれば）小説家でも何でもない当時の民の一人である。彼等は必ず仏菩薩の地上を歩いてゐるのを見たことであらう。それから又鳶に似た天狗の空中を飛んでゐるのを見たことであらう。

僕は前の話を批評するのに「美しい生ま々々しさ」と云ふ言葉を使つた。美しいか美しくないかは暫く問はず、この「生ま々々しさ」は『今昔物語』の芸術的生命であると言つても差し支へない。（二四四頁）

この生ま々々しさは、本朝の部には一層野蛮に輝いてゐる。一層野蛮やまひんに？―僕はやつと『今昔物語』の本来の面目を発見した。『今昔物語』の芸術的生命は生ま々々しさだけに終つてゐない。それは紅毛人の言葉を借りれば、brutality（野生）の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。（二四五頁）

僕等は時々僕等の夢を遠い昔に求めてゐる。が、王朝時代の京都さへ『今昔物語』の教へる所によれば、余り東京や大阪よりも娑婆苦の

少ない都ではない。成程、牛車の往来する朱雀大路は華やかだつたであらう。しかしそこにも小路へ曲れば、道はたの死骸に肉を争ふ野良犬の群れはあつたのである。おまけに夜になつたが最後、あらゆる超自然的存在は、―大きい地藏菩薩あまだの女の童わらわになつた狐だのは春の星の下にも歩いてゐたのである。修羅、餓鬼、地獄、畜生等の世界はいつも現世の外にあつたのではない。……（二四九頁）

説話世界もその時代においては「現世」だつたと芥川は言う。「登場人物を異次元世界に招く説話を、生々しい現実の人間世界に置換し」と先に述べたが、現代から見れば非現実的と思える説話世界もその時代の人々にとっては現実である。いや、現代においても信心深い人は多いし、奇跡や不可思議な話は枚挙に暇無い。ただ、科学というイデオロギーの環世界（ユクスキュル「生物から見た世界」）から「迷信」を批判しているだけではないのか。

ならば一見、対照的に見える説話の現実世界と芥川文学のそれは止揚できるであろうか。留意すべきは、いずれも物語であり、「テキスト」として我々の眼前にあることである。そこで「生ま々々し」さを保障するものは、実感またはディテールであつて、読者が物語世界に入り込むことと「現前」することとは違ふ。書かれたことは、語りの脱時間的「痕跡」であり、その辿り方は様々なのだ（その意味では、我々の体験も（経た）時点で「痕跡」である）。『芋粥』に戻れば、芥川が説話を翻案して近代人の実感に沿う人間を描いたということは言えるかも知れない。しかし、それは説話と近代小説のここでのありかたに過ぎないとは言わずもがなことなのである。

※芋粥の作り方については奈良女子大学「文化史総合演習」チームの「幻の甘味料あまづら（甘葛）の再現実験」二〇一一年三月の映像資料を

参考に紹介するなどした。

[http://www.nara-wu.ac.jp/grad-GP-life/bunkashi\\_hp/amadzura/amadzura\\_hp.html](http://www.nara-wu.ac.jp/grad-GP-life/bunkashi_hp/amadzura/amadzura_hp.html)

※論末に用いた「テキスト」「現前」「痕跡」は井筒俊彦の次ような言表に触発されたものである。

…時間とは、そして存在とは、「現前」の際限ない繰延べである。

「現前」がどこまでも繰り延べられていくようなものは、本当はものではなくて、ものの「痕跡」である。「痕跡」としての我自己同定されるものは、あるともないとも言えない。あるけれどもない、ないという形である、と言わなくてはならない。そんな微妙な形でのあり方である。我々の普通の存在世界は、このような微妙な形である。無数のものによって織り出される「テキスト」なのである。

この存在「テキスト」の織り出し、あるいは「書き」出しは、根源的に記号学的性格をもつ。ということとは、すなわち、それが、本当は実在するのにか実在しないのか誰にもわからない「指示対象」の彼方で、「能記」・「所記」の遊動が生み出す「指示対象」の幻影世界である、ということだ。それがすなわちエクリチュールの世界。エクリチュールの世界は、フロイトの語る「夢の舞台空間」と、構造的には少しも違わない。

（『意味の深みへ―東洋哲学の水位』「四　「書く」―デリダのエクリチュール論に因んで」（岩波文庫、二〇一九年三月刊・傍点は原文のママ）一五九頁